

〔亜熱帯における農業技術の普及及び経営指導〕

ミニトマト有望品種の特性把握（その2）

～「甘っこ」の普及に向けて～

菊池 豊

（営農研修所）

【要約】2007年度同様、「甘っこ」は、従来品種の「ネネ」より収量性が高いことに加え、障害果の発生も少なく、糖度も同等以上である。また、輸送中の裂果や重量の減少が少なく、輸送性や日持ち性も優れている。

【目的】

小笠原では2007年度より「甘っこ」の栽培が始まったが、従来品種「ネネ」との違いを明確にするため、昨年度に引き続き両品種の特性把握を行い、本土向けの出荷量も増加傾向にあることから、「甘っこ」の輸送性を確認する。

【方法】

供試品種の「甘っこ（丸種種苗）、ネネ（日本園芸生産研究所）」は2008年9月13日に播種し、10月3日に鉢上げを行った。定植は10月24日に行い、ベッド幅140cmの2条植えとし、樹勢の違いを考慮して株間は「甘っこ」50cm、「ネネ」45cmとした。基肥は「甘っこ」では成分量でN-P₂O₅-K₂Oを1-0.6-0.2kg/aとし、「ネネ」はその2倍量とした。追肥は窒素成分量で0.5kg/aを月に1回施用し、ホルモン処理は着果の安定を図るため、トマトトーンの100倍液を「甘っこ」のみ適宜散布した。調査は1区あたり「甘っこ」20株、「ネネ」22株の2反復とした。

輸送試験は船便に合わせ、概ね1週に1回、1月から5月にかけて計16回実施した。パック詰めのを3パック（1パック200g超）ずつ出荷箱に入れ、立川市内にある農業振興事務所まで送付し、同事務所の協力により重量変化と裂果個数の調査を行った（図4）。

【成果の概要】

- 1) 総収量、上物率、1果重、糖度ともに「甘っこ」が上回っている。特に「甘っこ」の糖度は1月から10Brix%を超え、4月まで上昇する傾向が見られる（表1、図1）。
- 2) サイズは「甘っこ」がL級とM級が中心で、この二つのサイズで90%以上を占めるのに対して、「ネネ」はM級とS級が中心で果実は小さめである（図2）。
- 3) 「甘っこ」は12月から3月にかけて順調に収量を伸ばしたが、「ネネ」は裂果の影響もあり、1～2月の収量が低下している（図3）。
- 4) 輸送試験では両品種とも合計48パックを発送したが、「甘っこ」は「ネネ」に比べ、重量減となったパック数が少なく、裂果割合も「甘っこ」より少ない（表2）。
- 5) まとめ：「甘っこ」は収量性、糖度、果実品質に加え、輸送性も「ネネ」より優れている。この結果を受けて母島では「甘っこ」の栽培本数が増加しており、2009年度産は前年度の約2倍の2,300本となり、本土への出荷に向けた取り組みも活発化してきている。

表1 ミニトマトの収量比較（1 aあたり，収穫期間：12月～4月）

品種	総収量 (kg)	上物果		上物果率 (%)	1果重 (g)	下物果の内訳 (%)		
		個数(個)	重量(kg)			裂果	キズ	その他
甘っこ	743	57465	676	90.9	12.9	72.6	11.5	15.9
ネネ	506	47569	396	78.1	10.5	95.3	4.2	0.5

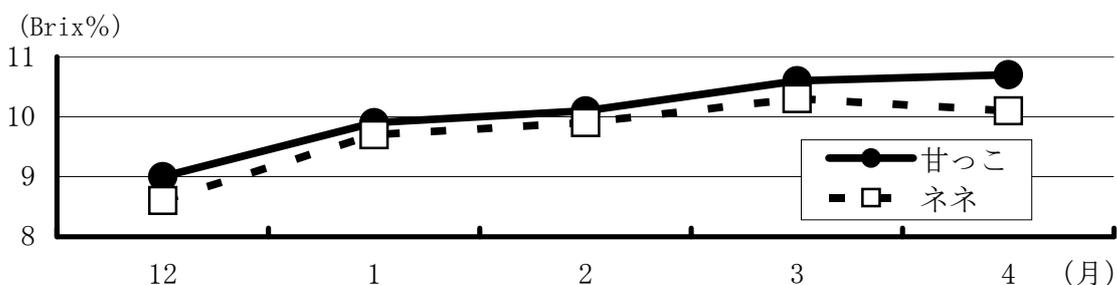


図1 糖度の推移

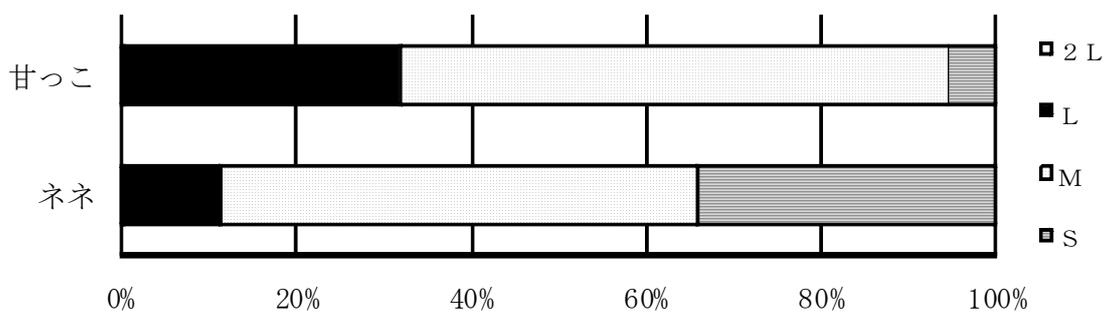


図2 サイズ別上物果収量構成割合 (2L:20g以上, L:15~20g, M:10~15g, S:5~10g)

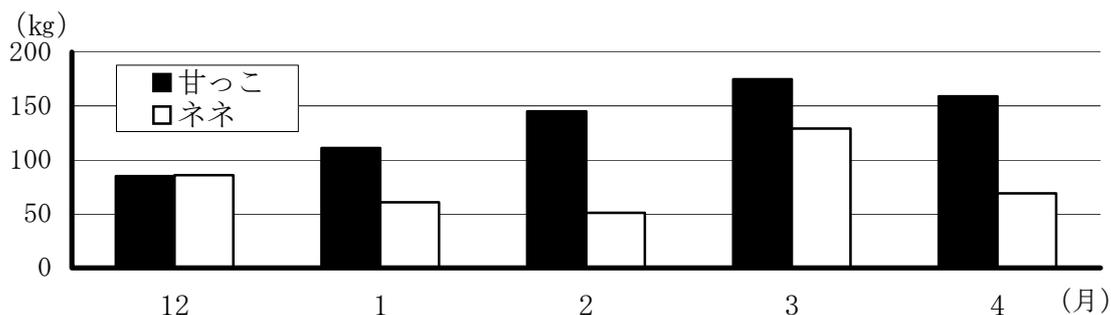


図3 月別上物果収量（1 aあたり）

表2 輸送試験結果（48パック中）

	重量減少パック数 (総減少重量)	裂果数/全個数 (裂果割合)
甘っこ	13パック (23g)	4/563 (0.7%)
ネネ	19パック (34g)	16/625 (2.6%)



図4 輸送試験の発送状態